

立たつ たつおのり

行のぶる

飛けい けいま

尖こま こま

粘ねり ねり

幹へた へた

約おさめる

綽はね はね

衝つ つ

開ひらく ひらく

覷のぞく のぞく

殺ころ ころ

割とる とる

頂かしら かしら

擦ひら ひら

躑はね はね

門かど かど

斷たつ たつ

打うつ うつ

點なぐ なぐ

征せい せい

癖くせ くせ

癖くせ くせ

聚あは あは

劫せき せき

持もち もち

標めがね めがね

勒つ つ

勅ちやく ちやく

夾はさ はさ

盤わ わ

鬆ゆる ゆる

持もち もち

跨また また

星せい せい

一右のほかにつかふ詞字

連つ つ

関と と

視のぞ のぞ

除のぞ のぞ

塗ぬ ぬ

駁は は

跨また また

突つ つ

咀の の

抑おさ おさ

刺さ さ

八は は

聖せい せい

星せい せい

井目いめ

爭道あ あ

贏輸か か

強弱つ つ

持碁ち ち

助言す す

先ま ま

碁筒い

饒三に に

硬節か か

虎口こ こ

綴五つ

饒三に

硬節か

虎口こ

〔一話一言 二十二〕碁打の花見

きさらぎ中比、四方の花ざかりなりとて、京中の男女老たるも若きもいさみあへる、我も友びとに誘れ、先東山の花と急ぎ、四條河原鼠戸の前をゆくに、上下となく立こみて、ゆくとも歸るともあしもとをえられず、からくく、り出て、祇園の櫻門に立やすらひ、をくれし友を相待けるに、我よりさきだちて、いづくともえらぬ人ふたり、心まづかみえて、打かたらひゆけり、ひとりは色白なる男と、ひとりは色黒き人也、井垣のもとに、まだつぼみたる花あるをながめ入て、色白なる男のいふ、

ひらかざる。花のかたちや重か半。

跡に先に諸人のゆくを見て、黒き男。